【特集】東と西

# 世界で話される英語―相互理解の指標に関する一考察―

山崎　妙

## 1. はじめに

世界のグローバル化に伴い、日本人も「国際共通語」とされている英語を身につけなければならないといわれて久しい。２０２０年に開催される東京オリンピック・パラリンピックに向け、さらに日本国内での英語教育の充実の必要性が叫ばれると予想される。文部科学省は２０１３年に「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を発表し、小・中・高等学校における英語教育を抜本的に充実させるとしている。改革の内容を見てみると、新しく小学校中学年に週１―２コマの「活動型」の授業を導入し、高学年では週３コマ程度の「教科型」の英語指導を行うというものがある。また、中学校・高等学校で英語の授業を英語で行うことが基本になるという。[1] このような改革により、「英語によるコミュニケーション能力を確実に養う」ことが出来るとしている。しかしこのような改革案に疑義をはさむ人は少なくない。様々な角度から批判されており、ここでその全てを挙げることは控えるが、筆者が最も深刻だと思うのは、鳥飼（２０１１）も指摘するように「英語によるコミュニケーション能力」が何を指すかが明確にされていないという点である。英語によるコミュニケーションというと、英語で流暢に会話をすることだと一般的には考えられているだろうが、言語学や外国語教育の研究者はコミュニケーション能力というものをより厳密に分析している。例えば、Canale and Swain（1980）やCanale（1983）によると、コミュニケーション能力は文法的能力、談話的能力、社会言語学的能力、方略的能力から成るという。文法的能力とは統語・形態・語彙・音声などに関する知識を操る能力である。談話的能力は複数の文をつなぎ合わせて意味のあるまとまりにしたり、その意味

を正しく理解するのに必要な能力を指す。さらに社会言語学的能力とは言語が使われる場での社会的規則に則って適切に言語を使用するための能力である。最後の方略的能力は、コミュニケーションがうまくいかない時に、言い換えたり繰り返したり聞き返したりといった様々な手段を用いて問題を解決する能力である。これら4つの能力は、文部科学省の改革案に従い小・中・高等学校で英語教育を週数時間行うことですべて十分に習得できるのだろうか。現実的には、誤解を生まないように英語で意思伝達が出来る学習者を育成するためには、目標をより限定し具体的に設定する必要があると考える。本稿では日本人が英語を使って意思伝達を行えるようになるために、どのような知識、能力を優先的に身につけたらよいのかについて考えたい。

まず次節では世界の英語話者の分類を紹介し、それぞれの特徴を簡潔に示す。第3節では、英語で意思伝達ができるようになるために必要な、「相手に理解される英語」について考察する。第4節では、「国際共通語」としての英語を用いて日常生活を送った経験を持つ日本人を対象に、理解される英語とはどのようなものかについて調査した結果を示す。最後に、日本の英語教育で優先的に教えるべきことを提案する。

## 2．世界で話されている英語

世界中で英語が話されているが、その英語の特徴は地域によって異なっている。Kachru（1985）はこの地域を内円圏（Inner circle）、外円圏（Outer circle）、拡張圏（Expanding circle）の3つに分類した。

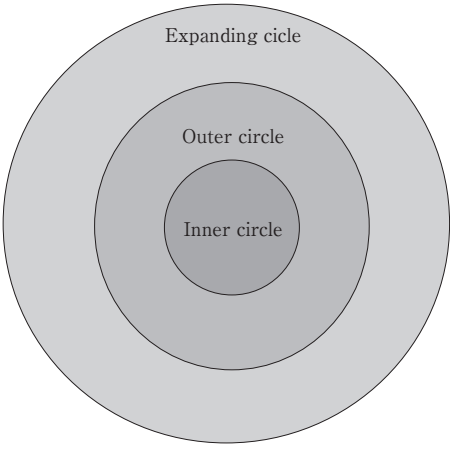


図1　3つの円で表す世界の英語の分類（Crystal 2003 | 部変更）

内円圏は英語が母語として使用されている地域で、アメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリアなどを指し、3億2千から8千の話者がいる。外円圏とされる地域では、英語とは違う言語を母語としながらも英語が第二言語、あるいは公用語として用いられている。主に英国の植民地だった場所で、インド、シンガポールなどに3億から5億人の話者がある。拡張圏は、日常生活に英語が使われることはほとんど無く外国語として学ばれている地域で、中国やロシア、日本などが含まれる。5億から10億の話者がいると言われている。つまり、世界で英語は母語話者よりずっと多くの非母語話者によって使われているということになる。

外円圏と拡張圏で使われている非母語話者の英語は、音声的な特徴、いわゆる外国人なまりだけではなく、文法や語彙など様々な点で内円圏で使われる母語話者の英語と異なっている。しかし外円圏では各地域の言語的及び文化的な特徴などを反映した独自の英語が広く使われ、それによって意思疎通が十分に行われている。何不自由なくその地域特有の英語を使いこなすこれらの人々の中には自身を英語母語話者だと認識している者もあり、Kachru（2005）はその考え方に賛同している。

一方、拡張圏に位置する日本人は、日本人どうしで英語を話す必要は通常ほとんどないため、外円圏の人々のように独自の、しかし系統だった英語を発達させることは考えにくい。日本人が英語を使う時は、日本人以外の人々と意思疎通を行うことを目的としているのである。ではそのような場合、日本人が習得を目指すべき国際共通語としての英語はどのようなものなのだろうか。次節では、一般的に言われる「通じる英語」とは何かについてなされてきた提案を紹介する。

## 3．理解してもらえる英語とは何か

### 3．1　理解度

本項では一般的によく言われる「通じる英語」を「国際的に理解してもらえる英語」であると考え、その特徴を探る。理解してもらえるかどうかを表す用語はintelligibility, comprehensibility, interpretabilityなど様々であり、研究者の間で使用する用語やその定義は一致していない。例えば、Smith and Nelson（1985）によると、intelligibilityは語や発話の認識度、comprehensibilityは語や発話の命題的意味の理解度になる。そしてinterpretabilityは話者の意図、つまりAustin（1962）のスピーチアクト理論でいうところの発語内行為についての理解度である。しかしBrown（1985）は、上記のintelligibilityはidentification、compre-

hensibilityはunderstandingとしている。本稿では、Jenkins（2000）が提案する非母語話者の発話が母語話者や他の非母語話者に理解されるために身につけなくてはならない音声的特徴と、Seidlhofer（2004）が示す母語話者の英語の規範からは逸脱していても意思疎通に支障をきたさない文法規則を扱う。したがって、Smith and Nelson（1985）の分類によるのならば最初の二つ、intelligibilityとcomprehensibilityに着目することになる。ただし今後、これらを合わせて「理解度」と呼ぶこととする。

### 3．2　音声・音韻的特徴—Jenkins（2000）の提案—

Jenkins（2000）は、異なる母語を持つ英語学習者の対話を分析し、その対話にみられた音声・音韻的特徴のうち意思疎通に支障をきたすものときたさないものを抽出した。そして、意思疎通のために不可欠な特徴をリンガ・フランカ・コア（Lingua Franca Core）と名付けた。リンガ・フランカとは異なる母語を持つ人がコミュニケーションをとるために用いる共通語のことである。英語は最大の話者を持つリンガ・フランカであり、リンガ・フランカ英語（English as a lingua franca: ELF）と言われる（Crystal 1997）。

リンガ・フランカ・コアは次の5つの要素について提案されている。

1．子音の音

大半は厳密ではなくとも類似した音ならば理解されるが、/θ/、/ð/、/ɹ/以外の子音は他の音で代用しない方がよい。

2．音声的特徴

強勢の置かれる音節の最初にある/p/、/t/、/k/の音は気音にする。[2] また、子音が硬音か軟音かによって先行する母音の長さが変わる規則も守るべきである。英語では無声子音が硬音で有声子音が軟音であり、軟音に先行する母音のほうが長くなる。

3．子音連結

語頭の子音連結は音を省いてはいけないが、音を足すのは場合によっては許容される。語頭以外の子音連結に関しては、省略しても理解度に影響しないことが多い。

4．母音

母音の長さを正確に発音しなくてはならない。

5．語に与える強勢

強く読む語と弱く読む語の区別を明確にしなくてはならない。例えば、YOU play tennis.とYou play TENNIS.（大文字は強く読むことを示す）を区別することで話し手の意図は正確に伝わるようになる。

これら五点については十分留意しないと意思伝達がうまくいかない可能性がある。

さらに、Jenkinsは一語を超えた単位で生じる音韻的特徴について述べている。まず、弱形と強形の区別[3]をしなくても理解度に影響はしないということである。機能語や重要でない語に弱形が用いられることはあるが、区別をしなくても意思伝達を妨げることはない。また、語の連結の仕方やピッチ、リズムが母語話者のものから逸脱していても、問題がない。

以上のように、音声・音韻的規則のうちコミュニケーションの妨げになる可能性が高いものと低いものが明らかになった。従来の発音指導は、個々の音を正確に発音する指導と合わせて文単位のイントネーションについて説明する、というような包括的な指導が多かったように思われるが、リンガ・フランカ英語を使う日本人は、重要な特徴に的を絞って確実に身につけることで効果的なコミュニケーションができるようになると考える。

3．3　文法規則―Seidlhofer（2004）の提案―

Seidlhofer（2004）もまた、リンガ・フランカ英語に見られる、母語話者の規範から逸脱した表現が必ずしも意思疎通を妨げるとは限らないと主張している。Seidlhoferは母語の異なる人々の多様なリンガ・フランカ英語の発話を記録し、VOICE（Vienna-Oxford International Corpus of English）というコーパスを構築して分析を行った。その結果、以下に示す文法・形態・語法などの問題はコミュニケーションの障害にはならないとしている。

1．三人称単数現在のsが落ちてしまう
2．関係代名詞‘who’とすべきところが‘which’になる、またその逆である
3．定冠詞・不定冠詞があるべきところにない、または必要のないところにある
4．適切でない助動詞を用いた付加疑問文
（例）…, *shouldn't they?*とすべきところが*isn't it?*や*no?*になっている

5. 不要な前置詞の使用（例）*We have to study about …*
6. *do, have, make, put, take*といった一般的な動詞を過度に使用する
7. 不定詞句にすべきところがthat節になっている（例）*I want that …*
8. 過度な語彙の使用　（例）*black*のかわりに*black color*

通常、教師が時間をかけて熱心に正そうとする間違いが、実はコミュニケーション上の大きな問題にならないのならば、問題になる部分の指導に時間を割いた方が良いと提案している。よく問題になるのは語彙の知識である。パラフレーズ（言い換え）をすることでわからない語彙を説明する技術を身につけていない話者の場合、特に問題が深刻になる。また、英語でイディオムとして使われている表現がリンガ・フランカ英語話者の母語では使われない場合、理解するのは難しい。比喩的な表現やイディオム、句動詞、決まり文句（例えば‘*This drink is on the house.*’）等についての知識の欠如がコミュニケーションの妨げになることは大いにあり得るという。

## 4. 調査

前節では収集した言語データを分析して意思疎通の妨げになる要因を論じた研究を二つ取り上げた。本節では、日常的にリンガ・フランカ英語を使った経験のある日本人に、「理解してもらいやすい英語」とはどのようなものかについて調査した結果を報告する。

インフォーマントは4人の日本人である。全員1年以上の英語圏在住経験があり、うち3人は職場で日常的に、1人は職場では少ないが地域で子育てをしながら日々リンガ・フランカ英語を使っていた。上記の3名は会議、ビデオ会議、業務連絡、e-mail、電話で英語を使っていた。以下、発音、文法、語彙の誤りが意思疎通に支障をきたすかという問いについての回答を順に見ていく。回答は付録1、質問紙は付録2を参照されたい。

まず発音についてであるが、「（5）母語話者のような発音が必要か」「（6）日本人なまりは理解されないか」という問い対しては全員が否定した。つまり全員が母語話者のよう話せないことに対して否定的な印象はいだいていないといえる。「理解されるため」に発音に関して注意していることは、1名が「個々の音」と

答えたが、3名は「強勢」をあげた。この要素についてはJenkins（2000）はコアにあげていなかった。この回答は、母語の影響もあり語内の強勢について日本人が苦手意識を持っていることを示唆していると考える。

次に文法の誤りについて見る。「（8）文法の誤りで問題は起こるかと思うか」という問いに対し2名が起こる、2名が起こらないと回答した。意思疎通に支障をきたす間違いとして挙げられたのは、仮定法による丁寧表現や助動詞の使い方である。「could have, would haveを使った表現が遠回しのアドバイスなのか嫌み・不満の表れなのか読み切れなかった」という説明がされていた。このような微妙なニュアンスを正しく理解できないと、思わぬ衝突が起きることになりかねないため、これは意識的に学ばないといけない領域なのかもしれない。

語彙についても同様の質問をした。「（10）語彙の誤りで問題が起こると思うか」という問いに3名が「どちらかというと思わない」と回答し、1名は無回答だった。この1名のインフォーマントは「語彙自体を知らないと意思疎通はできないが、いわゆる母語話者が使うような適切な語彙ではなくても類似した意味の語を使うことができれば、意思疎通はできる」とコメントしていた。これは、このインフォーマントがSeidlehofer（2004）のいうところの「パラフレーズ」をする技術を持っていることを示している。また、「語彙の誤りはあまり問題ではない」と答えた3名は、わからない語があればすぐに質問して確認するように努めているため、大きな問題に発展したことがないのだと報告していた。多くの語彙を知っているに越したことはないが、外国語を使っていればわからない語に遭遇したり、適切な語が思いうかばないということは避けられないだろう。語彙を増やすと同時に、わからない語をそのままにして誤解が生じないよう対策をとり、パラフレーズなどの方略を用いて自分の意思を伝えようとする姿勢を持つことが、リンガ・フランカ英語で意思疎通をしていくうえで大切なのではないだろうか。

最後に、リンガ・フランカ英語を媒介としたコミュニケーションで何が大切だと思っているかについて尋ねた。問12は「意思疎通に問題が起こらないように注意していることは何か」である。前述のように不明点を残さないようにすること、また自分が正しく理解しているかを明示的に相手に確認することが挙げられていた。それに関連するが、問13で「日本人が英語を使えるようにするにはどのような努力をすべきか」と尋ねたところ、3名が自分の考えていることを効果的に伝える訓練をするべきだと答えた。うち2名は、プレゼンテーションやディスカッションを成功させ

るために、英語の論理構成を用いなければならないと指摘していた。具体的には、主張や要点を先に述べ、その後にそれを支持するための根拠を示し、最後にもう一度結論として主張を述べる、といったような構成である。日本人以外の人がいる場では、日本語特有の文章展開は封印し、自分の主張がより伝わりやすい方法をとるのが賢明であろう。この点も、意識して英語教育に取り入れていかなければならない。

## 5. おわりに

本稿では、日本人がリンガ・フランカ英語を使って国際的なコミュニケーションを行う際、どのような特徴をもつ英語が相手に理解されやすく好ましいのかということを考えてきた。Jenkins（2000）は理解される英語の指標となる音声・音韻的特徴を明確に示し、リンガ・フランカ・コアに注目すべきだとした。またSeidlhofer（2004）は必ずしも意思疎通を妨げない文法・形態・語法などの誤りをあげ、英語学習者が優先的に身につけるべき知識の再確認を促した。さらに、リンガ・フランカ英語を日常的に使用している日本人を対象に、理解されやすい英語はどのようなものだと感じているか調査した。多くの日本人が/l/と/r/の音を正しく発音できないことを題材に、日本人なまりの英語は今までよく揶揄されてきた。しかし、実際に英語を使っている日本人は、それほど日本人なまりに対して否定的な感覚を持っていないという結果がみられた。また、業務を成功させるために必要な、正確な意思伝達と円滑なコミュニケーションを達成することを最も重視していることが分かった。さらに、彼らが英語の論理構成に従ったプレゼンテーションやディスカッションをする能力の必要性を指摘していたのが興味深い。今後の英語教育に優先的に取り入れていくべきことの一つといえるだろう。

音声・音韻や文法・形態・語法といった角度から「理解されやすい英語」が何かをとらえ、優先的に学ぶべき項目が明確化できれば、英語学習の効率が上がると思われる。ただSeidlhofer（2004）は、意思伝達を妨げかねない文法、形態、語法の誤りについて具体的に指摘していなかった。Jenkins（2000）が行ったように、これらの領域に関しても優先的に学ぶべき項目を明らかにすることは有益だろう。

今回行った調査を振り返ると、言語データの分析でないこと、インフォーマントが言語学的知識を持ち合わせていないことから、意思疎通を妨げる可能性のある音声的特徴や文法項目について正確な回答が得られにくかったという問題があると思われる。

英語が第二言語、あるいは公用語でない日本であっても、グローバル化した社会ではいつ英語を使う必要に迫られるかわからない。リンガ・フランカ英語の話者として自立して国際的なコミュニケーションを行える人材を育てるため、英語教員は今後も効率的な教育方法を模索していかなくてはならない。

## 参考文献


鳥飼久美子（2011）『国際共通語としての英語』講談社

文部科学省（2013）「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/12/__icsFiles/afieldfile/2013/12/17/1342458_01_1.pdf 2015.1.20閲覧

Austin, J. L. (1962). *How to do things with words*. Oxford: Clarendon Press.

Brown, G. (1985). *Speakers, listeners and communication: Explorations in discourse analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.

Canale, M. (1983). From communicative competence to communicative language pedagogy. In J. Richards and R. Schmidt. (Eds). *Language and communication* (pp. 2-27). London: Longman.

Canale, M. and Swain, M. (1980). Theoretical bases of communicative approaches to second language teaching and testing. *Applied Linguistics*, 1, 1. 147.

Crystal, D. (1997). *A dictionary of linguistics and phonetics*. Oxford: Blackwell.

Crystal, D. (2003). *English as a global language*, Second edition. Cambridge: Cambridge University Press.

Kachru, B. B. (1985). Standards, codification and sociolinguistic realism: The English language in the outer circle. In R. Quirk and H. G. Widdowson (Eds). *English in the world: Teaching and learning the language and literature* (pp. 11-30). Cambridge: Cambridge University Press.

Kachru, B. B. (2005). *Asian Englishes: Beyond the canon*. Hong Kong: Hong Kong University Press.

Seidlhofer, B. (2004). Research perspectives on teaching English as a lingua franca. *Annual Review of Applied Linguistics*, 24, 209-39.

Smith, L. E. and Nelson, C. (1985). International intelligibility of English: Directions and resources. *World Englishes*, 4, 3, 333-42.


## 註

（1）高等学校においては現行の学習指導要領でも英語で授業をすることになっている。

（2）気音とは強い呼気の放出を伴う音のことである。例えば、強く息を吐きながら「パ」というと、「パハァ」と「パ」の後に息が続く状態になる。

（3）例えば 'What did you do that for?' のforを/fɚ(r)/と強形にしても/fə/と弱形にしても意思疎通に影響がない。

付録１　アンケート結果

| | A | B | C | D |
|---|---|---|---|---|
| １頻度 | 毎日 | 毎日 | 毎日 | 毎日 |
| ２対象 | 母語話者、非母語話者、日本人 | 母語話者、非母語話者、日本人、 | 英語母語話者 | 英語母語話者、日本人 |
| ３場面 | 電話会議、email、社内会議 | 業務連絡、会議、email、電話 | 会議、ビデオ会議、電話、email | 診察、保育者と対話、英語学校の生徒 |
| ４母語話者の英語を身につけるべきか | 思う | どちらかというと思う | どちらかというと思う | どちらかというと思う |
| ５母語話者のような発音が必要 | どちらかというと思わない | 思わない | どちらかというと思わない | どちらかというと思わない |
| ６日本語なまりは理解されない | どちらかというと思わない | どちらかというと思わない | 思わない | どちらかというと思わない |
| ７発音で注意すべき事 | 個々の音の正確さ | 語の中の強勢 | 語の中の強勢、イントネーション | 語の中の強勢、イントネーション |
| ８文法の誤りで問題は起こるか | 思わない | 思う | どちらかというと思う | どちらかというと思わない |
| ９どのような文法の誤りが問題か | | 時制、仮定法による丁寧表現 | can/can't、助動詞（could/would have） | |
| 10語彙の誤りで問題は起こるか | どちらかというと思わない | | どちらかというと思わない | どちらかというと思わない |
| 11どのような語彙の誤りが問題か | | | I would say | |
| 12意思疎通のために注意していること | 理解を確認するために質問する、口頭とメールを使い分ける | 言いたいことをあらかじめ考えておく、自分の理解を確認する、電話でなく直接話す | 不明なことは確認する、英語の論理構成西がったプレゼンや文書、抑揚をつける | あいまいにしない |
| 13日本人が勉強すべきこと | プレゼンテーション、ディスカッション、論理的に説明する能力、日本の歴史・文化 | 英語を使う環境に身を置く | 効果的なプレゼン、スピーチ | 自分の意見をはっきり述べる |

付録2　質問紙

選択肢がある場合、特に指示がなければ最も該当するものを1つ選んでください（余白に記号を書くか、網掛けやマーカーなどでわかるようにしていただければ結構です）。選択肢の後に（　　）がある場合は、詳細を書いてください。選択肢がない場合は、自由に記述してください。

1 どのくらいの頻度で仕事で英語を使っていますか。あるいは使っていましたか。

2 英語で話す相手はどのような言語的背景をもつ人ですか。あてはまるもの全てを選んでください。
a. 英語母語話者（欧米）　b. 英語母語話者（非欧米）
c. 母語話者ではないが母語なみに英語を使いこなす人（日本人以外）
d. 日本人　e. その他（　　）

3 英語を使うのはどのような場面ですか。（例：英語が主に使われる会議をする、英語で議事録を書く、同僚と日常の業務連絡を英語で行う、電話で英語を話す、emailのやり取りを英語でするなど）

4 英語学習者は、英語母語話者の英語を習得すべきだと思いますか。
（選択肢）
a. 思わない　b. どちらかというと思わない　c. どちらかというと思う　d. 思う

5 英語母語話者のような発音を身につけないと、英語での意思疎通は難しいと思いますか。
（選択肢）
a. 思わない　b. どちらかというと思わない　c. どちらかというと思う　d. 思う

6 いわゆる日本語なまりの英語は、日本人以外の英語話者には理解してもらえないと思いますか。
（選択肢）
a. 思わない　b. どちらかというと思わない　c. どちらかというと思う　d. 思う

7 英語で意思疎通を行うために、発音に関して注意すべきことは何だと思いますか。あてはまるものを全て選んでください。
（選択肢）
a. 個々の音の正確さ　b. 語の中で強く読む音（ストレス、強勢）
c. イントネーション（文末の上げ下げなど）　d. その他（　　）

8 文法の間違いによって、英語での意思疎通に問題が起こることがあると思いますか。
（選択肢）
a. 思わない　b. どちらかというと思わない　c. どちらかというと思う　d. 思う

9 問8でcあるいはdと答えた場合、どのような間違いが意思疎通に問題を生じさせると思いますか。当てはまるもの全てを選んでください。
（選択肢）
a. 語順　b. 時制の間違い　c. 複数形sや3単現在sなどの規則の間違い
d. その他（　　）

10 語彙の間違いによって、英語での意思疎通に問題が起こることがあると思いますか。
（選択肢）
a. 思わない　b. どちらかというと思わない　c. どちらかというと思う　d. 思う

11 問10でcあるいはdと答えた場合、どのような間違いが意思疎通に問題を生じさせると思いますか。例があれば書いてください。

12 日本人以外の人と英語でやり取りをするとき、意思疎通に問題が起こらないように特に注意していることは何ですか。

13 将来仕事で英語を使おうと考えている人は、どのような勉強、努力をするべきだと思いますか。